

# りんごが木から落ちるのを見て、

## なぜニュートンは万有引力の法則を発見したのか？

イギリスの科学者であるアイザック・ニュートン。17世紀から18世紀にかけてニュートンはりんごが木からポトッと落ちるのを見て、万有引力の法則を発見したという有名な逸話（いつわ）がある。万有引力の法則というのは「物が落ちる」という現象と、太陽系の惑星の運行が同じ力に由来することを発見し、物体には互いに引きあう力があるという法則のことである。

歴史上の大発明や大発見というのは、たいてい何かのきっかけから生まれる「ひらめき」から始まっていると言っても過言ではないでしょう。一般的にも企業で大きな業績をあげたり、新しい分野を開拓したり、あるいは芸能人が有名になるのも、この「ひらめき」がキーワードになるのではないのでしょうか。ただ、このひらめく機会は神様が誰にでも平等に与えているのかというとそうではない。ひとつのことに熱中して、その道をきわめるぐらいの執着心を持って過ごす毎日を送っている人に与えられるものだと思う。ニュートンも天文学や力学のことに執着していなければ、りんごが落ちるという当たり前の風景を見て何も感じないだろうし、凡人が見ても「もったいない」と思うのが関の山でしょう。

ここでお決まりの陸上の話になる。自分が大学で陸上やっていた頃の話だから、かれこれ4分の1世紀以上も前の話である。当時、同じ陸上部にMという親友がいた。Mはいわゆる典型的なB型人間で、天真爛漫、単純明快な性格で、気分屋のところ玉にきず。いつも大脳を使っているようには見えず、ほとんど思いつきで行動しているようにしか見えない行動パターンの持ち主であった。(B型の人、ごめんなさい!)Mは800mを専門にしていたスピードランナーで、練習に取り組む姿勢もやる気のあるときとないときの差が激しく、レース展開もはまったときは速いが、そうでないときはメロメロな走りになるムラのある選手であった。自分の親父もB型であったせい、彼がいつも何を考えているのかが手にとるようにわかっていた。A型の先生とはなぜか気があい、朝から晩までいつもいっしょにいるそんな間柄であった。

彼が持ち前の集中力を見せはじめたのが確か2回生の頃だったように思う。「自分は将来、体育の先生になるために大学にいるのだから、他の教科を専攻している同じ陸上部員に負けてはならないし、他の大学の一般の学部で勉強している学生にも絶対負けたらあかんのや。」というこだわりの台詞(せりふ)を繰り返すように言っていた。インカレ(インターカレッジの略。大学で一番大事な試合に位置づけられる。)が近づくと、いつも練習の終わりにグラウンドで両手をついて膝まずいている。聞くと、「インカレで勝たし

てくださいと、陸上の神様をお願いしているんや」と言う。ある日、ふたりで道を歩いていると、野良犬が猛烈な速さで背後から走り抜けて行った。「やっぱり、4本足（で走るの）は速いな！」と、まじめに彼はつぶやいた。このとき、速く走ることに對するこだわりの強さがあったからこそ、4本足の動物の足の速さに目を見張ったのだと思う。ただ犬が走り抜けていったとしか思わなかった自分が、そのとき恥ずかしく思った。やがてインカレの800mで彼は1分55秒台の記録で優勝し、彼は同種目を3連覇した。

時が流れて、今から4年前の2月。今日から、1・2年生は学年末試験の1週間前のときで、当時3年生のTが陸上の自主練習のために（彼はすでに、清風高校で陸上を続けることが決定していた。）石灰倉庫にやってきた。そこで「ずいぶん散らかっているな」と、彼はポツリと言った。床は真っ白で、使い終わった石灰袋はびりびりに破れ、散乱していたのだ。次の日、授業で石灰倉庫を開けると、物の見事にきれいになっていた。ラインカーもきちんと整理され、しかも、石灰箱にはしばらく石灰袋を開けないで済むようにほぼ満タンの量の石灰がすでに入っていた。体育の授業で聞いてみると、やっぱりTであった。「（同じく自主練に来ていた）Aと、（持久走の補習に来ていた）Fもいっしょにやりました」と事もなげに答える。決してほめられようと思ってやったのではない。ふだん、自分達が練習で使っているところが汚かったから掃除するのは当然と考えているのでしょう。彼は、日常の生活でやるべきことを、あたりまえのようにやっている。つまり、いつも先生が言っている『凡事徹底』ができる選手なのである。

きちんと清掃された石灰倉庫を見て、みんなは何を思うのだろうか。何も気づかないのか。「誰がしてくれたんだろうか?」「これからはきれいに使おう」「自分も使いっぱなしではダメだから、今度は自分がやろう」…etc. もう、これ以上は書きません。自分の感性で読み取って下さい。

ひとつのことに熱中し、感性が研ぎ澄まされれば、日常の何気ないひとコマやさざまな風景からいろいろなことを学ぶことができるようになるのです。Tは決して大口をたたくような選手ではないが、いつもまわりの状況から今何すべきかを考えることのできる選手でした。何よりも陸上が好きで、陸上に関することは何でもよく知っていたという印象があります。はじめはそんなに足の速い選手ではなかったけれど、練習ではどんなにしんどくても、自分に負けない強い意志を持っていました。試合でも「粘り」が身上的な選手で、どんな展開でも決してあきらめませんでした。

そんな彼が去年東雲中の卒業生で初めて全国高校駅伝で都大路を走る選手になったのも決して偶然ではないでしょう。そのことが自分のことのように嬉しくて、大会当日は西大路通りの沿道から目いっぱいの声援を彼におくりました。一陣の風のように走り去った彼の背中から、自分もまた多くのことを学ぶことができました。

誰でもその気になれば、ニュートンに負けない大発見ができるのだと思う。